

近代漢語の一側面：『漢語英訳辞典』に見られる二字漢語のサ変動詞用法をめぐって

坂本， 浩一
福岡女子大学専任講師

<https://doi.org/10.15017/9436>

出版情報：語文研究. 77, pp.1-13, 1994-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

近代漢語の一側面

——『漢語英訳辞典』に見られる二字漢語のサ変動詞用法をめぐって——

坂本浩一

I. はじめに

幕末明治初期は漢語が非常に多く用いられるようになった時期であり、この時期の文献資料を国語学の研究対象として見る際には、やはり漢語の在り方に興味が惹かれる。その際、現代では見なれない語形に目を奪われることも多いが、一方で、現代に至るまで使われ続けている語形が、明治初期に於いては現代と文法上の性格を異にして用いられている場合も割合に見られる。例えば、

カク人民ヲ奴役ノ如クニ卑屈セシメ（明治5年刊 中村正直訳『自由之理』巻一・十ウ）

通常食後二時ノ末ニ至リテ胃ノ空虚スルヲ確定セリ（明治8年刊 坪井為春・小林義直訳『弗氏生理書』巻三・一九ウ）

の下線部に見られるように、現代では通常漢語サ変動詞としては使用されない語形が、「する」を伴って使われている場合がある。小学館『日本国語大辞典』に挙げる用例から各々の語の歴史を簡単に窺うと、「空虚」は古くから見られ、「卑屈」は明治期から使用例が見られるという違いはあるが、いずれの項目に於いても明治初期の文献に於いて「する」の付く用例が存している。

このように、明治初期の漢語の中には、現代から見ると「する」が下接して動詞化するとは思われないものに「する」の接続した例が少なからずあったようである。それらの漢語に於いては、現代に至るまでに漢語サ変動詞としての用法が失われていったことになるが、いったいどのような語形にそうした変化が見られるのであろうか。このことを明らかにするためには、まず、この種の漢語を明治期の資料から広く集めてくる必要があるが、このようなサ変動詞用法は当時に於いてさえ案外主流の用法でない場合が多かったらしく、当代の辞書資料に於いては簡単に行き当たらないもどかしさがある。そうした中で、サ変動詞用法に関する情報を割合に多く伝えていると思われる『漢語英訳辞典』を中心資料として、現代では殆どサ変動詞としては用いられない漢語の抽出を試み、今後の調査の基礎としたいと思う。

II. 『漢語英訳辞典』の概要

本稿では、漢語を豊富に収載しており、かつサ変動詞用法に就いての情報も得やすい資料として、『漢語英訳辞典 (A DICTIONARY OF CHINESE-JAPANESE WORDS IN THE JAPANESE LANGUAGE)』を中心に用いることとした。漢語辞書或いは漢語を多く収めた辞書は他にも数多いし、後に見るように『漢語英訳辞典』の記述は部分的に雑なところもないではないが、当面の課題に対する一つの足場としてこの資料を使いたい。尚、本資

料に就いては豊田実博士の簡単な紹介があるが、⁽¹⁾ 国語資料としての詳しい検討に就いては未だ十分に行われていないようである。

『漢語英訳辞典』は親字配列方式の二字漢語集で、親字索引には 3131 字の親字を挙げ、収載された二字漢語の項目数は落丁部を除いて 28419 ほどに上る。全三巻が明治 22 年 8 月、同 24 年 2 月、同 25 年 5 月の三回に分けて刊行されて居り、⁽²⁾ 各巻の内訳は次の通りである。

第一巻 (PART I)

序 (PREFACE) 2 頁 / 緒言 (INTRODUCTION) 12 頁 / 正誤表 (ERRATA) 1 頁
/ 本編 (A TO J) 325 頁

第二巻 (PART II)

正誤表 (ERRATA) 1 頁 / 本編 (K TO R) 357 頁

第三巻 (PART III)

正誤表 (ERRATA) 3 頁 / 本編 (S TO Z) 441 頁 / 親字索引 (INDEX OF INITIAL CHARACTERS ARRANGED ACCORDING TO THEIR RADICALS.) 62 頁 /
巻一・二正誤表補遺 (SUPPLEMENTARY LIST OF ERRATA IN VOLS. I AND II) 10 頁

著作者は英国人ゼー、エッチ、ガピンス (JOHN HARINGTON GUBBINS) で、英国公使館 (H. B. M's Legation) の関係者であることが序の末尾から分かる。

まずガピンスがどのようにして収載語彙を採集したかであるが、⁽³⁾ その手段については、「PREFACE.」中に次のようにある。

The words given in this dictionary are taken partly from official despatches, and from newspapers and other popular literature, and partly from Japanese Kan-go dictionaries those chiefly consulted being the 'Kan-go Ji-i' by Mr. Aoki Sukekio, the 'Dai-zō-ho Kan-go-kai Dai-zen' by Mr. Iwai Shinjirō, the 'Kan-go Ji-rui' by Mr. Shōhara Yasushi, and the 'Ga-zoku Kan-go Yak-kai' by Mr. Ichikawa Seiriū.

つまり、公文書、新聞、流行小説といった分野からの採集とともに、青木輔清『漢語字彙』庄原和『漢語字類』また岩井・市川の『大増補漢語解大全』・『雅俗漢語訳解』といった当代流行の漢語辞書群の参照も行っているということである。辞書資料以外の文献に関する調査を広く行うことは勿論今後の課題であるが、具体名の上がっている先行漢語辞書との継承関係に就いても、今回は調査し切れていない。併せて、継続調査の課題としたい。上記に続くガピンスの記述は次の通りである。

In the definition of the words and the determination of their English equivalents much assistance has been derived from Dr. Hepburn's 'Japanese-English and English-Japanese Dictionary,' from the 'Iroha Jiten,' a dictionary recently brought out by Mr. Takahashi Go-rō, and from the Chinese Dictionaries of Dr. Eitel and Dr. Williams.

ここでは、日本語の定義そしてまた英語との同定にヘボンの『和英語林集成』、高橋五郎の『漢英対照いろは辞典』を多く参照したことが述べられている。周知の通り、『和英語林

集成』の第三版（明治19年刊）の編集に際し高橋五郎はヘボンの日本語理解に助力した関係にある。当然、漢語をめぐる収載状況には興味のあるところであり、特に『漢英対照いろは辞典』との継承関係の一端に就いては、以下の調査報告の中でも触れたい。なお、Dr. Eitel・Dr. Williams 辞書との関係に就いては、現在具体的な手がかりを得ていない。

なお、次のガピンスの記述にも興味深いものがある。

The author's thanks are likewise due to Mr. Basil Hall Chamberlain, Professor of Japanese and Philology in the Imperial University of Japan, for suggestions as to the treatment of certain words. The same gentleman generously placed at his disposal an extensive and valuable collection of words, — the result of many years of research, — of which unfortunately the author could not avail himself owing to the necessity of imposing somewhat rigorous limits to a task which threatened to swell to unmanageable dimensions.

これによれば、帝国大学教授であった B. H. チェンバレンに日本語についての教示を得ただけでなく、彼の多年に亙る広汎かつ有用な採集語彙の参照にも及んだということである。事実であるならば、『漢語英訳辞典』の記述には口語文典等の著作で名高い日本語研究者の言語観察の反映も予測され、関心が寄せられる。⁽⁴⁾

Ⅲ. 『漢語英訳辞典』と当代主要辞典との比較

『漢語英訳辞典』が漢語の品詞区別に関してどのような立場をとっているかが、まず気にかかるが、「INTRODUCTION.」中には次のようにある。

A study of Kan-go discloses the fact that these compound words cannot be judged according to the syntax which governs most European languages, and that consequently it is not possible to classify them arbitrarily as nouns, adjectives, verbs, etc., to the exclusion, in each case, of their use as other parts of speech.

つまりガピンスは、西洋文典の基準に基づく品詞区別の適用が、漢語に関しては不可能であることを説くのである。

もともと漢語のサ変動詞用法をめぐることは、当代の邦人辞書編纂者に於いても、その対応が一様ではない。例えば、大槻文彦の『言海』凡例にある「名詞又ハ漢語ニ、す（為）トイフ動詞ヲ添ヘテ、志をり-す、（某）志るベ-す、（導）ぎろん-す、（議論）くふう-す、（工夫）ナドト用ルコトアリ、是等、一箇ノ動詞ノ如クナレトモ、スクナサバ、諸ノ名詞、漢語、動詞トナルベキヲ以テ、」の発言を承け、山田美妙が『日本大辞典』で猛反発する⁽⁵⁾など、漢語の用法記述に関して難渋しているさまが窺える。

ガピンスが手本にしたという『和英語林集成』の表示にしても、和語項目での品詞表示は動詞の自他区別に至るまで細かに行い得ているが、一方で漢語に就いて十分に指示しきれなかったことは周知の通りである。漢語が名詞・副詞用法専用の場合は「n.」・「adv.」の表示と英語説明部とが上手く噛み合うものの、動詞・形容動詞用法が絡んでくると、「v.」「i. v.」「t. v.」等の表示は曖昧に省略されるなどして、かえって混乱した印象さえ与えてしまっているというのが実情である。

結局ガピンスは、記号を用いる品詞表示の方法を取らず、「suru」「tari」「tosite」といった実用的な下接語(辞)の表示や、「(wo) suru」「(ni) suru」といった格助詞の表示によって具体的な用法を指示する記述に専念する。このことは、主流の用法を挙げるに留まりがちな当代辞書資料の中にあっては、漢語使用の実態を把握する上でかえって好都合なことであると言える。勿論、こうした用例重視の記述自体は例えば、『和英語林集成』に於いても既に行われているものであるが、漢語専用辞書でこれを行った点で価値がある。また、先に挙げたようにガピンスの発言通りであれば、用例部分の記述にはチェンバレンの冷静な観察を経たものも存するはずであり、『漢語英訳辞典』の記述には大いに注目したいところである。

それでは、まず『漢語英訳辞典』が当代の主な辞書資料に比して、量的にどの程度の漢語を収めているかということから簡単に見て行きたい。便宜上、「I (い・ゐ)」の部に限って全体を推することとしたいが、それぞれに収載された二字漢語項目数を勘定すると、次のようになる。

『和英語林集成』第Ⅲ版 (J. C. Hepburn 著・明治 19 年刊) ……………	305
『漢英対照いろは辞典』(高橋五郎著・明治 20-21 年刊) ……………	814
『漢語英訳辞典』 ……………	843
『言海』(大槻文彦著・明治 22-24 年刊) ……………	305
『日本大辞書』(山田美妙著・明治 25-26 年刊) ……………	369

極めて部分的な数値でもあり、辞書の目的も同一と言えないもの間での乱暴な比較でもあるが、『和英語林集成』・『言海』・『日本大辞書』といった辞書資料に比して、『漢英対照いろは辞典』と『漢語英訳辞典』の収載量の多さが一見して分かる。さらに言えば、『漢語英訳辞典』は『漢英対照いろは辞典』よりも二字漢語に関しては数量的にむしろ上回っていることから、二字漢語の資料としては量的な面に於いて不足ということはなさそうである。もっとも、『漢語英訳辞典』中には、漢字表示の後に直ぐさま「see～」として他の項目を参照させるものが I の部中で 182 語見られるなど、用法の判断が簡単に行かない面もあり、その点では慎重な扱いが必要である。

項目の数量で近接している『漢英対照いろは辞典』は、ガピンスが「序」に於いて、語の定義には『和英語林集成』と並んで多く補助とした旨を明言した辞書でもあった。果たして、『漢語英訳辞典』は単純に高橋五郎の記述を引き写すことが多かったのだろうか。双方の「I (い・ゐ)」の部の二字漢語の中で、サ変動詞用法に関する表示を有するものに就いて比較を行うと、次の結果を得る。

『漢英対照いろは辞典』

	(自)	(他)	(自他)	する・ To～	非動詞 用法のみ	項目ナシ	
『漢 語 英 訳 辞 典』	suru・ (ni) suru等	15 ・[8]	3 ・[2]	0	6	39	56
	(wo) suru	1	19 ・[4]	0	4	9	26
	suru・ (ni) suru等 及び(wo) suru	2	4	1	0	5	1
	To～	1	0	0	0	0	0
	非動詞用法のみ	0	0	0	0		
	項目ナシ	13	9	0	0		

まず、『漢英対照いろは辞典』に項目が無く『漢語英訳辞典』のみに存するものが合計で83語と多く見られることが、『漢語英訳辞典』の独自の収載部分として目を引く。もっとも、逆に『漢英対照いろは辞典』のみに収められているものが合計22語あり、必ずしも『漢語英訳辞典』のみが勝っている訳でないことも事実である。また、自他区別での齟齬も気にかかる。『漢語英訳辞典』で「suru等」、『漢英対照いろは辞典』で「他」となっている5例に就いて見ると、例えばその中の「印刻」に就いては、両辞書で次のような記述となっている。

『漢語英訳辞典』 suru, to engrave; carve; in-koku-sha, an engraver; carver.

『漢英対照いろは辞典』(他) 印刻, 彫鏤, ほりものする, ちりばめる To engrave. 英語説明部分のうち「engrave」は『和英語林集成』英和の部や『英華和訳辞典』(明治12年刊)で調べてみると他動詞に該当すると見られ、ガピンスが単純に「(wo)」を落としたのではないかと疑われる。もっとも、『漢語英訳辞典』が独自に記載している「carve」に就いては、『和英語林集成』英和の部は他動詞としてのみ扱うが、『英華和訳辞典』では他動詞用法とともに自動詞用法としての項目も立てており、ガピンスが「(wo)」を外した僅かな根拠に見立てることも出来る。また、『漢語英訳辞典』中、「鏤刻」の項記述に於いても「suru, to engrave; carve.」とあるところから、簡単な手落ちとばかり片づけられないところもあるが、他動詞用法を全く顧みていない点では、やはり疑問は残る。

こうしたことからすれば、『漢語英訳辞典』の記述の一部に就いて慎重に周辺資料と見比べて吟味すべき点があることは、率直に認めざるを得ないが、二字漢語の収載項目数に於いて『漢英対照いろは辞典』を凌ぐ点や、次にみるようにサ変動詞用法を独自に認めている点で、やはり注目すべき資料であることには変わりがない。

さて、『漢語英訳辞典』でサ変動詞用法を表示しているのに対して、『漢英対照いろは辞典』が動詞以外の扱いをした項目は53語ある。特に、その中『漢英対照いろは辞典』「(形)」表示の「違法」「違式」「陰鬱」の3語⁽⁸⁾に対して「suru」用法を認めた記述は、冒頭に挙げた用例のように、所謂形容動詞としての用法が主流と見られるものにサ変動詞用法が存在していた実態を反映したものであれば、価値のある情報となる。ここで、この3語に関する記述について、少し詳しく吟味しておきたいと思う。

まず、「違法」に就いての記述には、

an infringement of the law ; illegality ; illegal ; suru, (of persons) to transgress the law ; i-hō sho-bun, illegal action ; illegal measures.

のように、形容動詞用法に対応すると見られる。「illegal」が存する。しかし、「陰鬱」に就いては、

depression of spirits ; melancholy ; suru, to be depressed ; (of weather) to be dull and overcast.

と、名詞用法と漢語サ変動詞用法のみを窺わせる記述がなされるだけである。

一見すると、「nari」とすべきところを実態を無視して機械的に「suru」に置き換えているかのような印象すら与える。そこで、『漢語英訳辞典』に於ける所謂形容動詞用法の扱いを見てみると、タリ活用の場合は、例えば「陰々」に関して、

taru, secret ; cloudy ; overcast ; murky ; dark ; obscure ; gloomy ; depressing.

と記述しているように、「tari」「taru」を下接した用法の存在を明瞭に示す。一方、ナリ活用に相当する項目に関しては、次の「陰微」の記述のように、原則としては「nari」等を表示せずにいきなり英語形容詞を挙げる方式を取るのであるが、これはこれで一貫した方針となっており、したがって、ナリ活用の用法を記述するための手だてを『漢語英訳辞典』が持たなかったという訳ではない。

secret ; (of meaning) obscure ; vague ; abstruse ; im-bi-ni, secretly.

上の場合、項末に「ni」の付く用法を示しているが、ナリ活用系の語尾を伴う漢語に就いては、このように如何にも具体的な言語観察の中で採集された用例として挙げられている場合が多い。「洞見」の項目に於いても、

used in the expressions, dō-ken de aru, dō-ken naru, to be of the same mind ; have the same opinions.

のように、取り立てての扱いとなっている。また、次の「陰気」の項目のように、多くの日本語用例を列挙する場合もある。

the female principle in nature ; depression of spirits ; melancholy ; dark ; obscure ; gloomy ; lonely ; depressing ; in-ki ni naru, to be depressed ; in-ki na tenki, gloomy or depressing weather ; in-ki na basho, a dark, gloomy, or lonely spot.

「陰鬱」の所謂形容動詞用法に就いて『漢語英訳辞典』が記述していないのは単なる漏れであるかも知れないが、上記のような具体性を伴った記述の在り方から勘案すれば、「違法」「陰鬱」に「suru」の下接する用法があるとしている点に就いて、あり得なかったこととするよりは、『漢語英訳辞典』に実在の用法が反映していると捉えるのが自然ではなからうか。

なお、「違法」は『日本国語大辞典』で用例を載せていない語であり、『和英語林集成』に項目を存しないが、『言海』では「(名)」、『日本大辞書』では「根」表示で収められる。「陰鬱」は『日本国語大辞典』で国木田独歩『忘れえぬ人々』を初出例に挙げる語で、『和英語林集成』『言海』『日本大辞書』全てで項目を立てない新しい語形である。所謂新漢語の使われ始めに於いて、その文法的性格が定まらない旨の指摘に就いては、既になされたところである。例えば『岩波国語辞典』第四版で、「違法」は無表示(名詞)で扱われ、「陰鬱」は「ダナ」表示(形容動詞の用法)付きで扱われるなど、現代の側から見れば、こうしたサ変動詞用法はいかにも不安定な用法として捉えられるが、明治期のこの実態を記述している点で『漢語英訳辞典』は価値があると言えよう。

なお、「違式」に就いては、語形そのものは古くに見られるが、明治五、六年の「違式註違条例」公布とともに次第に用いられることが増えたものらしく、『漢語英訳辞典』には「違註」も「suru」「(ni) suru」表示で収載されている。『和英語林集成』では初版・Ⅱ版に項目が無かったのが、Ⅲ版に於いては「— wo okasu」の用例付きで立項されているが、『言海』『日本大辞書』には見られない。現代では、『岩波国語辞典』第四版には「名ダナ」表示でサ変動詞用法を示してはいないので、『漢語英訳辞典』で記述された段階でもサ変動詞用法は存在したものの、やはり主流ではなかった事情と解される。

「I (いゝる)」の部という限られた範囲ではあるが、『漢語英訳辞典』に記述された漢語サ変動詞の用法に就いて見た場合、部分的には「(wo)」の誤脱と思われる箇所が見られるなどするが、そうした点を慎重に取り扱って行けば、当代の他の辞書資料でなかなか窺い知ることの出来ない情報を見出し得るだけの価値を持つ資料と言ってよいかと思う。

IV. 『漢語英訳辞典』の漢語サ変動詞の現代語辞書との対照

以下に於いては、『漢語英訳辞典』の記述に見られる明治期のサ変動詞用法の中、どれほどのものが現代通用の用法として残り或いは廃れているのかを見て行きたい。

『漢語英訳辞典』に於いてサ変動詞用法の記述がある項目に就いて『岩波国語辞典』第四版と対照させて見ると、概ね次の結果となる。

『岩波国語辞典』第四版

	(自)	(他)	(自他)	非動詞 用法のみ	項目ナン	計	
『漢 語 英 訳 辞 典』	suru・ (ni) suru等	989	257	103	441	2348	4138
	(wo) suru	37	719	38	98	1173	2065
	suru・ (ni) suru等 及び(wo) suru	60	221	53	42	252	628
	計	1086	1197	194	581	3773	6831

ここでは、『漢語英訳辞典』に於いてサ変動詞用法の指摘のあった漢語を母集団としての調査であるために、逆に『漢語英訳辞典』でサ変動詞用法を指示していないものが現代に於いてサ変動詞に用いられる場合に就いて特に取り上げていないが、それに就いては別に機会を改めて検討したいと思う。

さて、当面問題としているのは現代で非動詞用法扱いとなっているものであるが、上表の結果で見ると合計で581語に上る。いま、これらに就いて具体的に挙げると、次の通りである。下位分類のa・b・c・d・e・fは、明治期の他の辞書資料に於ける用法認定の一つの目安として、それぞれ『漢英対照いろは辞典』での扱いの違い(「自」・「他」・「自他」・「する、To～」・「非動詞用法のみ」。「項目ナシ」)に依じて区分したもので、下線を施したものは「形」表示を有することを示す。また、「*」印の項目は、『岩波国語辞典』第四版で形容動詞用法(「ト」「タル」「ダ」「ナ」「ノ」等)の表示を有するものである。

1 : 『漢語英訳辞典』が「suru, (ni) suru 等」表示であるもの

1a	別離	中立	疑似	互市	群聚	破船	抱腹	自棄	恪謹	甘心
	寒心	感慨	恐惶	盟約	列坐	輪転	留別	劳苦	露座	羸瘦
	酸鼻	咄嗟	厭離							
1b	哀憐	弃理	部署	筆削	紡績	上刻	割烹	交互	温習	誓願
1d	压制	牧民	代償	独歩	悲鳴	奉勅	報恩	報劳	補闕	因循
	自尊	殉難	開運	汗顔	敬神	決死	謹賀	謹言	回天	関心
	勸業	観兵	温故	励声	連盟	臨御	立志	流離	僭上*	僭越*
	主戦	袖手	称名	疎水	尊王	耐久	停職	締盟	点茶	偷安
	頓首	養老								
1e	哀傷	愛欲	惡口	安逸*	安閑*	安寧	安樂*	売卜	晩学	別宅
	病軀	暴動	暴虐*	謀反	謀計	勃然*	武断	侮言	治乱	沈着*
	忠勤	弔詞	長寿*	朝見	著書	徵兵	断腸	断獄	脱字	同心
	賭博	杜撰*	不服*	布令	浮沈	腹心	劇談	言語	言論	義憤
	疑惑	偽筆	偽印	議事	御寝	玉座	娛樂	御惱	強盜	傲慢*
	軍談	破談	破戒	背面	博愛	犯罪	伴食	煩劳	堯話	平穩*
	兵備	偏頗*	偏見	偏向	秘訣	貧窮	筆耕	法問	放恣*	奉幣
	萌芽	奔命	違法	違例	違算	違式*	遺憾*	一言	一味	陰委
	陰徳	陰鬱*	淫奔*	飲酒	一揆	示談	自動	辞世	腎虚	住居
	従順*	上表	匿名	家作	家督	諸諱	客寓	間断	幹事	艱難
	逕庭	経国	軽拳	軽装	軽躁*	警察	建国	倦厭	堅忍	喧嘩*
	権輿	顕著*	血涙	決算	缺漏	結社	闕字	奇遇	气鬱	飢餓
	飢渴	規約	騎馬	亀卜	金主	勤王	狂暴*	胸痛	恭順	梟首
	虚飾	挙止	競漕	姑息*	高下	高低	高座	顧問	困難*	昏眩
	婚礼	魂胆	懇意*	苦難	苦痛	訓示	和平	過失	会意	会心
	快晴	完全*	灌仏	歓楽	歓心	観想	光耀	恍惚*	満開	模範
	熱心*	往還	阡弱*	雷鳴	卵生	連名	連累	練兵	略服	輪番
	臨終	旅寓	旅宿	立法	流言	流汗	老練*	詐欺	參宮	惨苦

施藥	成業	清談	製菓	先見	先進	遷化	遷宮	餞別	接骨
私通	視聽	詩集	試筆	心算	執權	執政	主意	祝言	執念
種子	上座	裝束	祝砲	争訟	送葬	操守	騒乱	束帶	惻隱
存亡	水練	垂死	醉狂*	他見	怠惰*	对策	对等*	適宜*	天上
纏綿*	投機	徒勞	疼痛	屠牛	当番	頭痛	通夜	烏合	鬱々*
猥雜*	夜業	夜行	夜戰	夜食	野戰	永訣	盈虚	詠歌	詠史
衛生	叡聞	遠隔	遠島	佯狂	預算	豫備	遊惰*	遊山	坐下
残念*	全知	絶板	造幣	造化					
1 f 軋轢	陪審	博奕	拔劍	備荒	暴慢*	謀慮	簿記	武備	分権
知慮	暢達*	諜報	大願	諾々*	富国	誣言	噴飯	下略	眩暈
嚴肅*	義戰	疑心	御遊	御座	互讓	強談	誤聞	佩刀	背教
犯則	汎論	悲喜	放生	砲戰	捧腹	補遺	彙報	一抹	陰謀
陰慘*	一発	地形	銃猟	情感	開府	寒行	感触	傾向	繫累
警世	企業	起死	既濟	既成	騎虎	救難	救世	攻守	梗概
苦熱	環視	觀相	荒亡	満期	入唐	横議	蓮步	理事	流血
濟世	撮要	征戰	請暇	惜別	洗足	接客	射利	捨身	写字
謝恩	至難*	思郷	施政	賜金	主務	祝着	尚古	頌徳	相思
喪家	搔痒	測度	存廢	炊飯	酔歩	大慶	大乱	退潮	隊列
对敵	靦面*	通辞	円転	蜿蜒*	遠足	越権	用兵	右文	絶後
造兵									

2 : 『漢語英訳辞典』が「(wo) suru」表示であるもの

2 b 蔑如	保険	報酬	呵責	経綸	羈伴	黙示	左翼	摂理	蘊蓄
右翼	幽囚	造作	忽諾						
2 c 屈辱									
2 d 保安	一統								
2 e 愛憎	牧畜	分明*	鎮守	徴証	斧鉞	言責	抱負	補注	維新
遺漏	一遍	溢美	滋養	慈愛	需要	仁愛	仁恕	上聞	情愛
開明	監守	刑罰	経済	軽重	兼愛	眷顧	牽強	嫌疑	結構*
闕所	忌諱	固有*	訓詁	恩賜	陸運	流刑	縲綬	殺伐*	専売
専制	節用	私用	主謀	消防	職掌	草創	粗製	天誅	天賦
特許	慾望	友愛	斬罪	禪讓					
2 f 知事	長恨	重罰	重責	腹藏	半切	汎論	平服	平衡	閉場
褒賞	直伝	序列	順列	回船	看守	簡閱	檢校	結締	公共
構造	力作	左記	賞与	厭忌	祐助				

3 : 『漢語英訳辞典』が「suru, (ni) suru等」・「(wo) suru」両用のもの

3 a 因襲	間隔	叫喚	模擬						
3 b 経歴	恭敬	沙汰							
3 d 叙位	叙爵	忌憚	虎視	全備					
3 e 長短	断頭	概略	疑問	誤脱	白眼	平和*	医療	一挙	潤沢*

簡略* 拳々 記事 毀譽 仇敵 口伝 政治 斜視 思慮 主任
 書記 大略 通弁

3f 断案 評判* 継嗣 究極 校了 大約 停刊

以上に就いて、簡単に纏めると次のようになる。

	a	b	c	d	e	f	計
1	23	10	0	42	255	111	441
2	0	14	1	2	55	26	98
3	4	3	0	5	23	7	42
計	27	27	1	49	333	144	581

「I (い・ゐ)」の部に於いて部分的に見たように、ここでも『漢語英訳辞典』と『漢英対照いろは辞典』との扱いの違いが見られ、特にe群が全体の57.3% (333 / 581) を占めることが目立つ。このe群の333語中、『日本国語大辞典』で見ただけでも99語に就いては「する」の付いた用例が存在する。『漢英対照いろは辞典』と齟齬する部分に就いても、先に「陰鬱」等の語例で検討したように、ひとまず実在の用法を映したものと思われ、今後広く用例を収集する中でガビンスの記述と実態とを結んで行けるものと思われる。

さて、上の語彙一覧中で、「*」印の付いた57語が『岩波国語辞典』第四版で形容動詞用法を持つとしているものである。これらの中、国内では新たに使われ始めた漢語と思われるものは、次の18語となる。

安逸⁽¹⁵⁾+ 沈着 不服 平穩 陰鬱 従順+ 喧噪 困難 熱心 老練
 対等 適宜 遊惰+ 暢達+ 諾々+ 陰慘+ 至難 固有+

ここで「+」印の付した語は、『漢語英訳辞典』に於いてサ変動詞用法のみを表示したもので、より動詞的な性格で捉えられていそうなものであるが、『日本国語大辞典』に於いてサ変動詞用法の用例を有することを示した二重下線の重なりがあるのは「暢達」「固有」の2語である。実際、これらのサ変動詞用法の記述は、

- (暢達) suru, to express one's views; publish one's sentiments; state one's opinions; (ni) suru, to excel (in anything).
- (固有) (wo) suru; to hold firmly; cling to; adhere to tenaciously; possess from times past.

となっており、他のものが概ね「to be+形容詞相当」の形式でサ変動詞用法を説明することが多いのに対して、動詞的な含みがより強い説明となっている。「固有」は、『米歐回覧実記』に「在来ノ米人ニ固有セルニアラス」(岩波文庫・一・245頁)とあるなどサ変動詞用法の当代用例は割合に多いのだが、これらの漢語に於いてさえも現代ではいずれもサ変動詞用法が衰えてしまっているところに、明治初期のサ変動詞用法をめぐる漢語の在り方と現代の在り方の相違の一端が窺える。

当代は、それまで和語を使っていた表現を漢語で表現しようとする傾向が急激に高まった時期であり、漢語がサ変動詞用法を取る機会が多い中で、漢字一字一字が動詞性を帯び

て用いられることもまた多かった。この時期、「暢達」に於ける「暢」も「固有」に於ける「有」も、それぞれ動詞的性格を発揮しつつ熟語を構成し、サ変用法を取るようになっていたものであるが、現代に於いてはそうした一字の持つ働きがこれらの熟語の中で変容しているのである。

例えば、3f群の「断案」に就いて見れば、『漢語英訳辞典』の記述は、

an opinion formed with deliberation ; a decision ; conclusions ; views ; (wo) suru, to decide ; suru, to form an opinion ; arrive at a conclusion.

となっており、「(wo) suru」用法の記述は、「断定」の「(wo) suru, to decide ; determine ; fix.」と同様である。「断」は、明治初期に於いて、

蓋シ政府ノ関係スベキ事ト。関係スベカラザル事トヲ断^{マツ}ムル。(中村正直『自由之理』第一卷十五ウ)

の例に見るように「to decide」の動詞的意義を特に重用され使われた漢字である。そして「断」は、類同の意義を持つ「定」とともに「断定」や、

カクノ如キヒトハ閑居独处ニテ考^{カウ}定^{テイ}断^{タン}スルモノヲ(中村正直『自由之理』第二卷4オ)

のように、その転倒語形「定断」を構成するなどしていた。そして一方、「案」の側でもまた「案察」「考案」など、サ変動詞用法を持って新しく使われ出した動詞性漢字連続形を構成していたのである。こうした事情からして、「断案」に就いても、明治期に使用され始めた当初は、類同の動詞的意義を持つ漢字連続形として「to decide」の義のサ変動詞用法を持つ漢語であったと見なし得る。

その「断案」が現代に至るまでにサ変動詞用法を衰えさせていったのは、前部要素の「断」が後部要素に対して修飾成分となる気味合いを強めていったからであろう。「断然」の盛行に見るように、「断」字は「はっきり、きっぱり」といった副詞的意義を押し出すようになった。そのために、「断案」も動詞性漢字の並列構成の熟語というよりも、〈修飾成分+被修飾成分〉の構成で受け取られ用いられることが増し、結局漢語サ変動詞としての用法は弱まって行ったものと思われる。鈴木英夫氏が「完」に就いて、「おわる」から「徹底的に」への意味の変遷を説かれたが、「断」も同様に熟語の構成に於いて動詞的意義から副詞的意義へ主流を移していった漢字の一例と言える。

他の語例に於けるサ変動詞用法の衰退に就いても、それぞれの構成漢字をめぐって様々な変化が生じていることが推測される。今後は、一覧表で取り挙げた漢語個々に就いて、また構成する漢字一字一字に就いてその変化の追跡調査を行うことが必要となろう。なお、ここでは明治初期に所謂形容動詞用法を持った漢語全体を検討の対象としなかったので、漢語に「ナリ」「タリ」の下接する用法自体がどれほどの勢力を持ち、また「スル」の下接用法と緊張関係にあったかななどの問題に就いても、さらに追究して行かねばならないところである。

V. おわりに

明治初期の漢語に就いて、『漢語英訳辞典』に載せられた情報から、その用法の一端を窺ってみたが、やはり事例の調査を重ねることが急務である。実際、ここでガビンスが取

り挙げたものもどうやら当時の有り様の一部を反映したもののようで、冒頭の「空虚」「卑屈」だけを取ってみても、それぞれ『漢語英訳辞典』中では「suru」用法の指摘がない。このことに就いては、非主流の用法に対する辞書記述の限界と見ることもできようし、或いは明治の極初期に対してガピンスの編纂時に於いて、これらの語に就いては既にサ変動詞用法が衰退しているとも見ることもできる。いずれにしても、この時期に現代では非動詞的意義で捉えられる漢語が「する」を伴う現象は、思ったよりも広く見られるものであることは確かなことと言える。また、『漢英対照いろは辞典』との比較で明らかなように、『漢語英訳辞典』に記載されていない漢語に就いても、まだまだ他の辞書資料には多く存する点、早急な調査の実施が要請される。勿論最終的には、辞書資料に留まらず広く多くの文献資料を調査する中から言語の実態をより明らかにする必要があることは言うまでもないことである。

最後になったが、今回の調査に於いて貴重な資料を閲覧させて下さった九州大学文学部英語学英文学研究室のご厚意には、深く御礼申し上げる次第である。

注

- (1) 豊田実博士『日本英学史の研究』99頁。
- (2) 九州大学蔵本には、本編中821頁-828頁、837頁-844頁にかけての落丁がある。従って、「SHIN」・「SHIU」の親字を持つ項目中の一部に於いて、採集した語形以外にも『漢語英訳辞典』中にはサ変動詞用法を有する項目が存するものと思われる。また、親字が字音のアルファベット順に配列されるため、同一字が複数の箇所親字として出現する場合がある。
- (3) 著作者の片仮名表記は第一・二巻の奥付による。第三巻では、「ジェー、エッチ、ガピンス」。なお、「PREFACE」中には、「H. B. M's Legation」に関係のあった「Okamoto Jun」・「Kuribayashi Junzō」が『漢語英訳辞典』の編集に際して助力したことも紹介されている。
- (4) 実際、『漢語英訳辞典』中に於いては、敬語に関わる用法などによりかなり詳細な説明が付けられる場合が多く、日本語に対する観察が付け焼き刃でないことが窺われ、如何にもチェンバレンの「the result of many years of research」の顕現を感じさせる。こうした点を含め、チェンバレンの文献等との関連に就いての検討は、別の機会に譲ることとしたい。
- (5) 『日本大辞書』「緒言」(十八)に於いて執拗に『言海』を攻撃している。
- (6) 「する」「に」等の下接した項目を含む。また、比較の都合上、アルファベットで第一音節が「Yū」相当となる「いう」等で始まる項目を除く。なお、ここでは、『漢語英訳辞典』の項目数に、見出しの後に「see～」とだけ示した項目も含めている。
- (7) 『漢語英訳辞典』の「suru・(ni) suru等」は所謂自動詞用法に相当するもので、「(wo) suru」の他動詞用法と区別した。用例部分のみにサ変動詞用法が見られるものは、自他を文脈から判定して表に含めた場合がある。なお、動詞の自他区別で問題となる経由・通過等の「を」格に就いて言えば、『漢語英訳辞典』では英語対訳の事情絡みであろうが、原則として表示されていないようである。『漢英対照いろは辞典』の「する・To～」は、「(する)」表示のみで自他区別の表示がないものと、「する」に於いて自他表示がなく英語説明部が「To～」形式としてあるものを示す。また、「非動詞用法」としているものは、「(名)」「(形)」「(副)」等の表示があるものと、そうした表示は無いが英語説明部が名詞(句)相当に受け取られるものを含む。なお、〔 〕中の数字は『漢語英訳辞典』での項目記述が「see～」形式であり、その指示先の項目に当該のサ変動詞用法の記述があったもので、通常項目と一応扱いを別にしておいた。『漢語英訳辞典』で「To～」の一例は「suru」表示の誤脱と思われる。『漢英対照いろは辞典』では「(する)」表示なしに、英語説明部が「To～」となっている場合がかなり多く見られるが、『漢語英

訳辞典』に於いて「suru」表示抜きに「To～」の形式が取られることは原則としてないようである。

- (8) この中には、『漢英対照いろは辞典』が「～ing」表示としているものが5例含まれるが、「～ing」表紙で「(名)」表示を伴った例が『漢英対照いろは辞典』には散見するので、名詞相当に扱った。
- (9) 『漢英対照いろは辞典』の「(形)」表示は、対応する英語が形容詞(句)であることを示しており、見出しが和語形容詞の場合も形容動詞用法を持つ漢語の場合もある。厳密に言えば、見出しの漢語の品詞的性格に就いては慎重に判断しなければならないことは言うまでもないが、ここではひとまず所謂形容動詞としての性格を認定しているものとして扱っておく。
- (10) 『日本大辞書』では『言海』に対抗して、サ変動詞用法を記述する立場を取り、さらに「名詞」と区別して「根詞」を立てる。漢語の「根詞」に就いて、山田美妙は「根詞ノ特質ハ主ニ又ハなるヲ添ヘテ形容詞トナリ、さら加ヘテ、程度ヲ示ス処ノ名詞ニナルナドノ事デ、」と説いている。
- (11) 森田良行氏「新漢語成立に伴う動詞性の問題」(『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』明治書院 所収) 他。
- (12) 『漢語英訳辞典』で「suru」表示の他「asobasu」等の敬語辞で示してあるものなども一応表に含めた。なお、「serareru」・「sareru」の受け身表現で表示してある場合などで格助詞の接続が不明なものなどは、表に含めなかったものがある。また、落丁部分に就いては表に出て来ていない。
- (13) 漢字表記・字体の僅かな違いに就いては或程度柔軟に処理した。
- (14) 判断基準等は「I (い・ゐ)」の部の場合と同じ。
- (15) ひとまず『日本国語大辞典』に拠って、国内初出用例が幕末以降のもの、或いは用例不挙の扱いとなっている語を、ここでは挙げることにする。
- (16) 鈴木英夫氏「新漢語の造出と享受 一明治前期の新聞を資料として一」(『国語と国文学』昭和55年4月)。